

「消費者」から「生活者」へ

——大熊信行氏の「生活者」論を素材として——

森 脇 丈 子

【目 次】

はじめに

I. 大熊信行氏の「生活者」論が受け止められた社会的背景

II. 大熊信行氏の「生活者」論のキー概念の検討

(1) 「人間生命の再生産」論

(2) 「必要」の概念

(3) 「消費者」から「生活者」へ

おわりに

はじめに

長引く平成不況のもと、労働者の雇用と生活をいかにまもるかといった話題とともに、「生活者」としていかによりよく生きるかといった話題もしばしば目にする。現在、日本社会では「生活者」という用語が頻繁に使われている。とりわけ1990年代には、新聞、雑誌や書籍、政府刊行物などにも「生活者」が用いられるようになってきた¹⁾。この言葉は、使用する人によって、その意味するところはきわめて多様であり、明確な一つの規定が存在しているわけではない。しかしながら、そこに共通して含まれているのは、つぎのような内容である。

第一の意味は、こうである。わたしたちの生活は、物にあふれた社会のなかで営まれている。各人は労働者であったり、自営業者であったり、学生や主婦であったり、所属する社会階層はさまざまではあるが、みんな「消費者」として生活している。ところで、「消費者」というと、主には営利企業によって生産され市場に出された商品を消費する人として人間が存在していることになる。だが、わたしたちは、「消費者」である前に「生活者」なのである。つまり消費するためだけに生きているのではなく、生活をするために生きているのである。さらにいえば、よりよい生活をめざして、生きているのである。現代社会に生活する人間を表現するためには、「消費者」ではなく「生活者」という用語を用いるほうが、わたしたちの生活や意識の実態に合致しており、さらにはより人間らしい生活にむけての努力がいつそうなされるはずである。

第二に、「生活者」という用語が意味しているのは、こうである。それは、「豊かさ」を実感できない今日の生活から脱却するには、職業生活の部面における問題の解決努力によってはなされないとみる主張を含んでいるということである。そのように主張することで労働運動や政治運動にたいして独自のスタンスをもつイデオロギー集団が形成され、また地方政治において一定の活

動基盤や支持基盤を固めるような現実的影響力をもつまでに発展している。これらの動向は、市民社会の発展という意味で評価されるべきものであると筆者は考えるが、同時に、資本—賃労働関係という客観的な経済関係からまったく離れた、超歴史的な、「生活者」としての共通利益に基盤をおけば、今日の社会システムで「豊かさ」が実現できるかのような空想性を持ち、労働運動を軽視するなどの点で、現実的な弱点をもっていると考えられる。

筆者は、「生活者」という用語がこうした問題を含んでいると考えている。本稿の課題は、「生活者」という用語が含有する意味を検証することにある。とりわけ、経済学者として「生活者」概念を提起した先駆者とみなされている大熊信行氏をとりあげ、氏の主張を検討し、氏の主張する新しい経済学のあり方の意味を問うことである。

大熊氏は、「人間中心」の思想をかかげて、1960年代にマスコミに登場した。氏は、経済を「人間生命の再生産」といった立場からとらえ直すことを提起し、「消費者」と対比する形で「生活者」という用語を提起した。大熊氏は、生産第一主義から「人間中心」主義への移行を唱え、そのために必要な理論枠組みとして「人間生命の再生産」論を提起している。彼にとっての経済学は、「経済学というのはもともと支配者のための科学であり、人間のための科学では決してない³⁾」ものであり、人間中心の新しい経済観にとっては新しい学問を必要とするというものである。その課題とは、一つに、現代文明の経済観というものは、近代科学的・一面的なものにすぎないのであり、これを常識の世界に引き入れることの危険に対して警告をならすこと、もう一つは、経済学における商品中心のもののみかたに対して、人間を中心とするもののみかたを確立すること、であるという。そして、「必要なことは、現代の経済観が、その反対物であるいま一つの経済観を、とにかく自己の内部に同時に持つ、という一事である⁴⁾」として、「人間生命の再生産」論、「必要」の概念、「生活者」論を構成要素とする新しい経済観をつくりあげようと試みるのである。

以下では、第一に、大熊氏の「生活者」論がマスコミでとりあげられるようになった1960年代の社会的背景について、国内的ならびに国際的な特徴を指摘し、第二に、大熊氏の消費にかかわる議論のなかからキー概念をとりだし、それらを検討することをとおして、氏がこれらの概念を用いることで何を提起し、何を解決しようと試みたかを明らかにし、第三に、そうした作業を通じて、「生活の豊かさ」研究の課題整理を行ないたい。

- 1) 「生活者」という言葉をタイトルに用いた書籍は1990年代以降しばしば目にするようになった。例えば、以下のようなものをあげることができる。名東孝二『生活者の行動科学』（東洋経済新報社、1979年）、同『生活者の革新：日本におけるコンシューマリズム』（オリオン出版社、1970年）、ライフデザイン研究所『生活者意識データ集』（ライフデザイン研究所、1998年）、御船美智子『生活者の経済』（放送大学教育振興会、2000年）、同『家庭生活の経済：生活者の視点から経済を考える』（放送大学教育振興会、1996年）、片山又一郎『現代生活者試論：類型化と展開』（白桃書房、2000年）、増田大三『流通システムの構図：生活者満足へのパラダイム・シフト』（中央経済社、2000年）、野村総合研究所社会・産業研究本部『変わりゆく日本人：生活者一万人にみる日本人の意識と行動』（野村総合研究所情報リソース部、1998年）、荻田嘉彦『消費者から生活者へ：消費者の時代は終わった』（みくに書房、1997年）、奥住正道『顧客社会：生活者中心の流通戦略』（中央公論社、1997年）、毛利明子『生活者の経済原論』（御茶の水書房、1997年）、秋谷重男、食品流通研究会編『卸売市場に未来はあるか：「生活者重視」へのチャネル転換』（日本経済新聞社、1996年）、佐藤慶幸、天野正子、那須壽『女性たちの生活者運動』（マルジュ社、1995年）、大前研一『生活者革命』（新潮社、1995年）、

- 暉峻淑子『ほんとうの豊かさとは：生活者の社会へ』（岩波書店，1995年），石川弘義ほか『生活者市場論』（中央経済社，1994年），経済企画庁編『生活者のための経済10の提言』大蔵省印刷局，1993年），横田澄司『大都市生活者のマーケティング』（白桃書房，1992年），同『大都市生活者の消費構造』（同文館出版，1993年），安部文彦『生活者志向のマーケティング』（白桃書房，1991年）。
- 2) 大熊信行氏は，国家や個人，家庭といった領域でも多数の論文，著作を發表しているが，本稿では，大熊氏が資本主義の生産や消費に関して叙述をしている論文を中心に，わたしのおこなう「生活の豊かさ」研究での課題整理と関連のあるもののみを取り扱うことにしたい。
 - 3) 大熊信行「物量主義の否定へ——いささか学問的な考察——」『週間東洋経済』1965年，新春特大号の83ページ。
 - 4) 同前の85ページ。

I. 大熊信行氏の「生活者」論が受け止められた社会的背景

日本社会における「豊かさ」にかかわる議論のブームは，1970年代後半にはじまる「中流意識」論争であった。この論争の中心人物は，岸本重陳氏，富永健一氏，村上泰亮氏であった。それぞれの主張を端的にまとめると，つぎのようである。

岸本重陳氏は，日本国民の大半が自分の生活水準を「中」レベルであると考えてはいるが，彼らの大部分は労働者階級であり，彼らのもつ「中流意識」は「幻想」であるという。彼らがそうした「幻想」をもつにいたった要因として岸本氏が指摘するのは4つである。第一は，自分の過去の生活よりも今の生活のほうが改善されているという，現在と過去との比較によるもの，第二は，生活をよくしようとがんばってきた自分の努力を認めたい気持ちによるもの，第三は，自分の生活のなかに世間並みとみなすことのできるものが含まれているという世間並み意識によるもの，第四は，雇用拡大にもとづく，比較的安定した経済感によるもの，である。⁵⁾

富永健一氏は，現在の日本社会には，一貫した「上」と一貫した「下」との間に，多元的な「中間」が非一貫的に存在しているとして，「階層（Stratification）」を，多元的に把握しようとする。⁶⁾

村上泰亮氏は，現在の先進国といわれる国々では，すでに「階級（Class）」という概念は消滅したかもしくは消滅しつつあり，この状況は日本にも当てはまると指摘した。村上氏によると，日本社会の「中流意識」をもつ人たちは，マルクスのいう「中産階級」ではなく，別の階層分類としての「新中間大衆」であるという。村上氏は，この「新中間大衆」という用語をもちいることで，日本社会の階層を流動的かつ非構造的なもののみとし，マルクスの「階級」との違いを指摘している。⁷⁾

高度経済成長のなかで大量生産された消費材が勤労諸国民の生活にも浸透し，日本の生活様式が確立するなかで，こうした議論がブームとなった。勤労諸国民の生活実感として，実質賃金の上昇に裏打ちされた物の所有にもとづく「生活の豊かさ」が存在していたのである。

第二のブームは，暉峻淑子氏の提起による「豊かさ」論がきっかけとなった。ここでは，経済効率のみを追求してきた「特殊な国」である日本の生活を旧西ドイツの生活と比較検討して，

「動物や植物とともに命を大切に生きて生きる⁹⁾」といった地球的レベルでとらえた「豊かさ」が提起され、働きすぎの日本人が、「心の豊かさ」とは何かを考えるきっかけとなった¹⁰⁾。それに引き続いて、政府により「生活大国」をめざすことを旨とする報告書がだされる。1992年には、政府の諮問機関である経済審議会の答申で『生活大国5か年計画——地球社会との共存をめざして——』がだされ、そこでは「生活大国」や「生活者」といった用語がキーワードとなった。翌1993年には「生活者」の用語をタイトルに用いた提言が経済企画庁編で出版されることになり¹¹⁾、日本社会に「生活者」という表現が定着することとなった。

そして、第三のブームが近年の「中流崩壊」論争である。橋本俊詔氏が所得と資産からみた日本の所得格差のひろがり¹²⁾を指摘したことに端を発し、「中流」をめぐる議論がなされている¹³⁾。こうした議論が論壇でとりあげられたのは、それぞれがデータに基づいた現状分析にもとづくものであったことに理由があるが、国民の生活実感としての格差のひろがりがあることもこれらが受け入れられた社会的背景となっている。高度経済成長期には、横並び意識にもとづいて、多くの国民が自分の生活を「中」とみなしたが、現在の日本社会では多くの国民が「中」からのずり落ち、ずり落ちかかっている、もしくはそうなる危険が身の回りに存在することに不安をかえながら暮らしているというのが実情であろう。

以上にみたように、「生活者」という用語が日本社会でひろく使われるようになってきたのは1990年代からであるが、天野正子氏によると、それはすでに1930年代後半から生活文化を主張した人々によって用いられてきたという。天野氏によると、生活者論の時代的な変化はつぎのように説明されている。

第一は、1930年代後半から1940年代にかけて、生活文化論を主張した三木清、新居格によるものである。三木は、生活とは切り離された学問に疑問をもち、生活を担う民衆の姿を個別的な存在として認識するという立脚点に立った。新居の「生活者」は、大企業や大銀行、官庁などに帰属する人ではなく、自分で自分の生活に対する決定権をもつ人として想定された¹⁴⁾。

第二は、敗戦から1950年代の考現学や生活学の基礎を築いた今和次郎によるもの、さらに、農村に生きる生活者を模索した溝上泰子によるものである。今和次郎は、「生活」を構成する基本要素として労働、休養、娯楽、教養の4つをあげ、それらが関連しあって生活が成り立っていると見た。生活は、労働者の再生産にかぎらず、余暇活動や精神活動までも含むものとみなされた。こうした生活の諸活動の総体における生活文化の担い手、生活改善の主体者が「生活者」と考えられた。溝上は、農民、とくに女性を対象として、農村で実際に生きている「生活者」をとらえなおすことを試みた。そこでの「生活者」は、貧困が人々にあきらめの感情をもたらしばかりでなく、そうしたなかでも現実の生活の困難さから生活を創造する人々を意味する¹⁵⁾。

第三は、1960年代にマスコミに登場した大熊信行によるものである。ここでの「生活者」は、商品を消費する人々、つまり営利企業の対象である「消費者」と区別され、生活の基本が自己の再生産にあることを自覚しており、「欲望」にふりまわされずに生きることをめざす人々のことである¹⁶⁾。

第四は、1960年代後半以降の「ベ平連（ベトナムに平和を！ 市民連合）」運動のなかで用いられたもの、つぎに、そうした「新しい社会運動」に引き続く活動の一つである生活クラブで用いられたものである。「ベ平連」の運動の担い手は、政治を職業としない「生活者」と表現さ

れた。生活クラブでの「生活者」は、大量生産体制のもとで提供されてきたこれまでの自分たちの生活をあたりまえのものとして受け入れるだけでなく、それらに疑問をもつような人間になると日常的な実践をおこなう人々のことである。¹⁷⁾

では、つぎに大熊氏の「生活者」論が登場した社会背景をみていくことにしよう。まずは、国内の消費生活面についてである。わが国ではじめて「消費革命」という言葉が使用されたのは、1958年の『経済白書』である。そこでは、「三種の神器」と表現された電気洗濯機、電気冷蔵庫、白黒テレビが多くの国民に普及し始めたことが指摘されている。1960年代半ばにはさらに消費市場は拡大し、自動車、電話、カラーテレビなども普及し、快適な生活がこれらの物とともに形作られていった。経営学ではマーケティングと呼ばれる分野が成長しはじめ、「豊かな社会」の成熟へむけての準備が整っていった。日本経済の発展は、勤労諸国民の生活様式にも変化をもたらした。あたかも使い捨てが美德であるかのような消費が促進された。この時期をとおして日本社会では、企業のみならず多くの人々の固有の関心の領域として消費がとりあげられるようになったのである。

日本では、1960年代にはいり急激に家庭での消費生活に変化が生じた。いわゆる「日本の生活様式」¹⁸⁾が高度経済成長とともに形成されるようになったのである。1950年代にはじまる農村の若年者の都市への流入と労働者人口の増加は、生活面からとらえると定期的で相対的に安定した賃金を取得する人々を増加させ、彼らの生活を資本主義的商品市場に組み込み、消費生活面での企業の蓄積基盤を拡大させることと結びついた。都市労働者は、モダンで快適に映る洋式の生活形態をとり入れた新しい生活様式にあこがれをいだいた。その典型的な生活は、団地生活である。団地生活はサラリーマンのあこがれとなり、そこでは陽光のさしこむ明るいダイニングキッチンや洋間の設置ならびにイスと机の生活、水洗トイレ、アルミサッシの窓などを特徴として、大量に生産される家電製品が受け入れられる場となっていった。団地生活や各住居における新しい生活様式の普及は、単なる生活の便利さや快適さだけから求められたわけではない。日本経済の急速な経済成長にあわせて自らの生活を変えていくことで自らの所得や社会的地位も上昇していることを他者に知らしめる役割ももっていたのである。日本社会の生産の様式となった「大量生産・大量消費」のシステムは、このようにして日本社会の生活様式の革新に劇的な影響をもたらしたのである。

つぎに、同時期の国際的な社会背景とのかかわりでの特徴を当時の論壇からとりあげると、以下のようなものである。

一つは、ソ連社会に対する現状認識やスターリン批判をめぐる議論が行なわれたことである。マルクス主義における人間の問題や社会主義体制の問題などをめぐって、論壇ではしばしば特集が組まれた。例えば『理想』1957年1月号の表題は「マルクス主義の新展開」、同じく『理想』同年の11月号の表題は「マルクス主義は現代にたえうるか」、同雑誌1969年5月号の表題は「社会主義とヒューマニズム」となっており、各論者による上記のような問題についての意見がかわされている。社会主義では、生産手段の社会化をとおして資本主義よりもより「豊かな社会」が実現するかもしれないという展望は、現実の社会主義諸国によりいたるところでギャップを生み出し、社会主義への問い返しが行なわれた。

また、社会主義における人間や労働の問題だけに限らず、資本主義における労働のあり方にも

関心が向けられていた。経済発展の続くこの時期の日本社会では、青年期のマルクスが、資本主義の現実批判として一時期とっていた見地である人間の自己疎外といった状況があてはまるかのような事実が存在していた。「大量生産・大量消費」のシステムのもとでの労働は、長時間、過密、単調なものであり、とりわけ大企業の製造現場で働く労働者にとっては労働をとおして自己実現をしたり、労働から得られる喜びを実感するような場は与えられていなかった。だが、こうした厳しい労働環境は、それと引き換えに毎月の賃金を保障するものであったし、労働の現場での困難さえ我慢すれば、家庭での比較的良好な生活が保障されるものでもあった。こうして職場労働とは切り離された生活の世界での人間としての楽しみや快適さを求めようとする人々が増加し、「マイホーム主義」や「私生活至上主義」といった言葉が現れるようになったのである。こうした現実を反映して、論壇では「人間とはなにか」や「疎外」論に関する議論も展開されていた。

これらの社会背景が、次章以降でとりあげる大熊氏の「生活者」論が受け入れられるイデオロギー基盤となっていたと指摘することができる。

- 5) 岸本重陳『中流の幻想』講談社、1978年。
- 6) 富永健一編『日本の階層構造』東京大学出版会、1979年。
- 7) 村上泰亮『新中間大衆の時代』中央公論者、1984年。
- 8) 暉峻淑子『豊かさとは何か』岩波書店、1989年。
- 9) 暉峻淑子『豊かさとは何か』岩波書店、1989年の79ページ。
- 10) 1980年代後半の日本社会の「豊かさ」をめぐる議論に関しては、拙稿「現代資本主義における『豊かさ』とは何か——『豊かさ』をめぐる諸議論の類型化——」『立命館経済学』第45巻第3・4号、1996年10月を参照されたい。
- 11) 経済審議会生活大計画推進委員会検討委員会〔原編〕、経済企画庁編『生活者のための経済10の提言：経済審議会生活大計画推進委員会検討委員会報告』大蔵省印刷局、1993年。
- 12) 橋本俊詔『日本の経済格差——所得と資産から考える——』岩波書店、1998年。
- 13) 「中流崩壊」に関する議論には、例えば佐藤俊樹『不平等社会日本 さよなら総中流』（中公新書、2000年）、『文藝春秋』編集部「新・階級社会ニッポン」（『文藝春秋』2000年5月）、金子勝「三つの格差『所得・世代・学歴』を突き抜ける道」（『論座』2000年7月）、盛山和夫「中流崩壊は『物語』にすぎない」（『中央公論』、2000年11月）などがある。
- 14) 天野正子『「生活者」とはだれか——自律的市民像の系譜』中公新書、1996年の第1章参照。
- 15) 同前の2章参照。
- 16) 同前の3章参照。
- 17) 同前4章参照。
- 18) 「生活様式」概念の検討ならびに「日本の生活様式」の形成過程についての詳細は、拙稿「資本主義の発展と生活様式の変化——アグリエッタの『フォーディズム』概念を素材として——」『立命館経済学』第43巻第2号、1994年6月と、「日本の生活様式とレジャー消費支出——「消費ノルム」の形成——」『立命館経済学』第50巻第2号、2001年6月を参照されたい。

II. 大熊信行氏のキー概念の検討

大熊氏のキー概念の検討に入るまえに、氏の思考の軸となっている「人間中心」の思想とはい

かなるものであるかをみてみよう。氏によると、人間の永遠の主題は、生命の再生産であり、物財の生産はその目的のために避けておれない課題として位置づけられるという。氏によれば、物の生産のために人間が存在するのではなく、人間の生命を存続させるために、物財の生産が必要なのである。氏は、この観点こそが、「人間中心」の思想であるという¹⁹⁾。

では、大熊氏は、この「人間中心」の思想を提起することで何をめざしているのでしょうか。1960年代の日本社会の生産力の発展と生活の変化を目にするなかで、大熊氏はつぎのような問題意識をもっていた。すなわち、それはこうである。「豊かな社会」である現代の社会では、生産物の内容、満たされる欲望の内容が問われるべきである。生産力の低い社会では、物財の生産が生活必需品の増加に直接結びつくことから、その社会の目標が物的生産力と国民所得の増加になることは理解できる。だが、生産力がさらに発展していくなかで生産される物財のなかには、人間の生存を保障するもののほかにも多様なものが存在する。生産力の増大が社会の欲望の充足を高めるものとする考えもあるが、「豊かな社会」にとっては、経済的に意味のあることと人間の生活にとって意味のあることとは必ずしも一致するわけではない。このことから、物質の生産力の増大のみをめざす経済学は、常識の世界（人生の意味を考えること…引用者）からはずれてゆくことになるのであり、物的生産力の増大とそれによってもたらされる商品の意味、欲望の内容を考え直す必要があるのである。このことについて、大熊氏はつぎのように述べている。

「常識の世界にもどってみれば、この世には同じ商品は商品でも、絶対に必要なものから、あってもなくてもいいものにいたるまで、種々雑多のものがある。人間の欲望でも、生理的生存の必要にねざす欲望から、心理的な欲求にすぎない流行性の欲望にいたるまで、種々雑多である。

物的生産力の増大を、無条件・無制限に謳歌することは、供給される生産物の内容を問わないことであり、満たされる欲望の内容を問わないことである。乏しい社会においては、物的生産力の増大と国民所得の増加が、とりあえず生活必需品の増加を意味すると考えられるかぎり、物的生産が経済の目標であることを疑う余地はない。しかるに「ゆたかな社会」では、物的生産力の増大は、経済的にそれほど重要な意味をもたなくなってゆく。いや、経済的には重要だとしても、人生的には重要性を失ってゆく。これは常識の世界で考えれば、明白なことである。

しかるに今日の経済学者は、その独得の欲望理論をふりまわして、物的生産力の増大は、ますます社会の欲望充足を高めるものだ、という見解を支持する側に立っており、『ゆたかな社会』が直面している新しい問題に、科学的なメスを入れるべきことを忘れて²⁰⁾いる。

こうした問題意識から提起されるのが、大熊氏の「人間中心」の思想であるが、その思惟の方法論的な基礎は、「生理的・物質的という二種のエネルギーが、生産と消費の関係において、一周の連鎖をなす²¹⁾」という認識をもつことであるとされる。これは、大熊氏の「生命の再生産」に関する主要な理論の軸であるが、以下では、大熊氏のキー概念（本稿では「人間生命の再生産」論、「必要」の概念、「生活者」概念をとりあげる）を通じて、その意義と問題点を明らかにしたい。

（１）「人間生命の再生産」論

大熊氏の「人間中心」の思想を検討するにあたって、最初に取り上げるべきはこの「人間生命の再生産」論である。氏は、日本社会が物財中心、生産力増大中心の社会となってしまったのは、

経済学でいうところの「生産」の概念が社会一般にまで適用されていることにその原因があると、その事態を憂いている。氏は、経済学における「生産」の概念の使われ方に限定的な意味を与え、「生産」概念に「人間生命」の生産の意味をもふくめて解釈することが大切であるという。では、はじめに氏のいう「二系列の生産」についてみてみよう。

生産と消費の関係について、大熊氏はつぎのように理解する。働くことは、体力や精神力などの生理的エネルギーを消耗すると同時に、商品を生み出すので、それは物質的エネルギーを作り出すことである。食べることは、実際に食料を消費することであるから物質的エネルギーの消耗であり、それは同時に体力を回復し生命を持続させるので生理的エネルギーの生産である。生理学的な物質代謝と、経済学的な物質代謝の認識を同一平面でとらえることが「人間中心」の社会形成にとって必要なことなのである。氏の説明は以下のようである。

「働くことは、一方において生理的エネルギーの消耗であり、他方において物質的エネルギーの獲得である。食べることは一方において物質的エネルギーの消耗であり、他方において生理的エネルギーの生産である。生理的・物質的という二種類のエネルギーが、生産と消費の関係において、一周の連鎖をなす。この連鎖の認識が、改めて必要である。

生理学的な物質代謝と、経済学的な物質代謝の認識。それを同一平面においてとらえるような科学的立場が必要である。それが『人間中心』の思惟の方法論的な基礎である²²⁾」。

大熊氏によると「生産」はもともと生命現象にもちいられた言葉であるという。経済学の理論証明が商品生産に集中することにより、それは物財とサービスに限定して用いられるようになった。そのため、物財の生産は、人間の生命の維持のために必要な条件であるにもかかわらず、物財中心に「生産」概念がもちいられるようになってしまったのである。こうして人間の生活にとって物の生産がいかなる意味をもつかということよりも、物の生産のために人間の生活が利用されるかのような社会になってしまうという。

『「生産」という一語は、もともと生命現象に用いられた言葉であり、なかならず人間の生命にかかわる言葉であったことは、いまでも『お産』という言葉があるので明らかである。

（中略）『「生産」という一語が、物財とサービスに専用されることになったのは、経済学の理論的証明がいよいよ商品生産のみに集中し、人間そのものの再生産は、『陽のあたる場所』を失ったということにほかならない。いうまでもなく、これは本末転倒である。物の再生産は、人類の生命と生活の持続のためにこそ必要な条件であり、人間の自己再生産という未来の目的をはなれては、すべて物の再生産は一瞬にしてその意義を失うはずである²³⁾」。

さらに、大熊氏によると、「労働力の再生産」は、経済学での抽象であり、実際に存在しているのは、人間そのものの再生産である、という。

「ところで注意を要するのは、『労働力の再生産』というものは、経済学に特有の抽象であって、真に実在しているものはなにかといえば、それは、人間そのものの再生産だということである²⁴⁾」。

では、「生きる」とはいかに説明されているのであろうか。大熊氏によると、人間が「生きる」とは生活すること、暮らしをたてることである。働いては食べ、食べては働くことのくり返しが生きるということの最も素朴な意味である。これが、経済学的な用語法にしたがえば、「生命の再生産」になると説明される。

「食べては働き、働いては食べる。——すなわち生きるということは、そういった特定のことがらの、日常的な反復である。それが『生』の持続であり、『生』の日々の更新であり、そして経済学的な用語法にしたがえば、『生命の再生産』である。『再生産』とは、消費が生産につらなり、生産が消費につらなる循環の過程を、生産の反復という視点からとらえたもの。『生』は反復である。それは個としては日常的な反復である。と同時に種としては、個の死生点による反復である²⁵⁾」。

大熊氏の「人間中心」の思想からすると、経済とは、働くために食べ、食べるために働くという関係のことである。その目的は、生命の維持であり、それは食べることでなく、また働くことでもない、という。このことは、氏の経済にたいする見方から発生するものと思われる。経済のとらえ方についての氏の説明を聞いてみよう。

「経済とはいったいなんであろうか。人間そのものを主体とし、人間中心に経済を考えることにも理由があるものとすれば、わたしはこう答えたい。——経済とは人間が働いては食べ、そして産み、食べては働くことである。それをいいなおして、経済とは働くために食べ、食べて産み、生まれたものが食べるために働く、という循環の関係である。食べることが目的なのでもなく、働くことが目的なのでもない。それらの循環を通して、生きてゆくこと、生命の維持することが目的である。生命の存続と維持こそが、経済というものの永久の課題である²⁶⁾と」。

経済学の古典派のなかにあった「労働力の再生産」を、家庭での消費は労働力も再生産するが人間そのものを再生産しているのとらえることが大事であるとする大熊氏の指摘がここにはみられる。さらに家庭で行なわれる消費に関して、氏は独自の解釈を示している。それは、生命再生産のための消費もまた「生産的消費」であると解釈できる、ということである。つまり、家庭での消費は人間の生命を生産するものであるから、これも「生産的消費」なのである。

大熊氏によると、近代経済学は、労働価値学説の否定から出発し、もともと経済学の古典思想には存在していた「生産」の二重の意味（物的生産と人的生産）を拒否し、生産といえば物の生産であるとして「生産」の意味を狭めてしまった。その結果、企業は「生産単位」、家は「消費単位」とよばれるようになり、「消費経済」「消費者」「消費材」といった言葉が生まれたという。氏によれば、家庭は、人間そのものと労働力という二つを再生産するので、家庭は二重の意味で再生産の場である。つまり、家庭を消費の場としてのみとらえるという近代経済学の発想が誤りであると氏は指摘するのである。氏の解釈によると、人間が生きているかぎり家庭では人間そのものが再生産されつづける。だが、現代は経済学の用語が社会に浸透してしまった資本主義であるから、家庭は人間の再生産のみならず、同時に、労働力を再生産する場にもなっている、とい²⁷⁾う。

「生命再生産のための消費もまた『生産的消費』であり、これを『最終消費』などと呼ぶことは、とりもなおさず経済における循環の論理を見失うことである²⁸⁾」。

以上が、大熊氏の「人間生命の再生産」に関する基本的内容である。

では、氏のなかで人間と動物の生命の再生産はいかに区別されているのであろうか。

大熊氏の追求したい人間観は、「生理的＝経済的人間観」である。人間を生物一般としてとらえると、「それは人間を有機体として、生命の単位として、物質代謝の主体として、とらえるこ

とである²⁹⁾という。そして、大熊氏は、人間を他の動物から区別する特徴を「働くもの」であること、人間は「働く」と同時に「たくわえる」ものだとする。経済は、「労働」と「蓄積」といった二次元の構造をもつものだと氏は考えている。

大熊氏の提起した「人間中心」の思想はいかなる意味を持っていたのであろうか。それは、高度経済成長と所得倍増のスローガンのなかで、生産力の増大と所得の増大が第一に追求される社会状況であった1960年代に、大熊氏が人間にとっての生産第一主義を社会に問いかけた点にあるといえよう。実質賃金の増大による各家庭への家電製品の普及や消費欲望の増大、労働面では長時間労働や労働密度の増大などの労働疎外の状況といった現実、誰の目にも明らかとなった。これらは、企業の利潤拡大第一主義のもとでは避けておれないが、大熊氏の考える「人間中心」の思想を社会に徹底させ、より人間らしい生活にむけての努力を人々に喚起するためには、従来の経済学の理論だけでは対応しきれものではないとして、新しい理論枠組みを提起しようとした独自の発想を氏はもっていたのである。こうした現実感覚にもとづく社会への問いかけは、その後の「豊かさ」論の展開にも共通するものであるといえる。

ではここで、氏の「人間生命の再生産」論に関して検討すべき問題点を明らかにしておこう。それは、大熊氏が「生産」の概念を物財の生産とともに人間生命の生産としてもとらえるさいに、両者を平面的・同時的にとらえるという観点についてである。氏はこの観点こそが「人間中心」の思想には大切であると述べたのであるが、そのことによって労働により人間が成長する側面をすべて否定される点に弱点があるといわざるをえない。氏の労働のとらえ方は、労働は人間にとっての苦痛であり、労働により人間の発達が促されるという立場をとるものではないので、氏のこうした見解がでてくるのは氏の理論枠組みから考えれば理解できることである。しかしながら、人類史の発展の側面から労働の概念をとらえるならば、労働することによって人間の発達が促されてきたのであるから、人間の発達にとっての労働の役割をとりあげない氏の理論は不十分である。資本主義においてはその労働が資本の蓄積運動との関連でさまざまな制約をうけており、人間の成長に直結するような形での労働はおこなわれにくい点があることは事実である。そのため、労働者は、労働による成長や創造の喜びなどを実感する体験はきわめて少ないか、あるいは氏のいうように苦痛をより多く体験するかもしれない。だが、こうした労働は、人間の成長にとっての労働の普遍的な役割ではなく、資本主義という歴史的な経済規定のなかで生じた労働の具体的な現れ方であると理解しなければならない。

氏 concepts の把握の特徴は、その超歴史的な把握のしかたにある。このことにより、氏は、現実の具体的な消費や労働の分析ができないばかりか、超歴史的に人間の発達にとって有用な役割をはたす労働の意味さえ把握できなくなってしまうのである。つまり、氏には、歴史的経済規定をふまえたうえでものごとの分析をおこなう方法をもちあわせていないから、資本主義の経済規定をうけた労働と労働がもつ人間にとっての普遍的な意味を区別して、正確に把握することはできないのである。こうした方法上の弱点を氏はもっている。氏のいうように、人間の成長にとって労働のもつ役割を否定し、生活面での自由をいかに獲得できるかということだけが人間の自由の領域の拡大であると理解するのは誤りである。現実の社会の分析、あるいは「生活の豊かさ」の分析にとって必要なことは、社会関係に規定された具体的な消費や生活、労働のあり方が分析されることなのである。

しかしながら、氏が超歴史的に生命の再生産をとらえようとしたことの正当性も評価しておく必要があると筆者は考える。生命の再生産はいつの時代にもおこなわれており、そのことによって人類は生存しつづけてきた。大熊氏の「人間生命の再生産」論では、生命の再生産を資本主義の歴史的・経済的規定性ぬきに提起した点に理論の欠陥があることは否めないが、資本の蓄積があまりにも優先され、人命が軽視されるかのような社会の現状が当時の日本社会に存在していたことも事実であり、公害をはじめとする現実を目の当たりにしていた人々にとっては超歴史的な人間観、「人間中心」の思想はきわめて受けいれられやすい内容の提起であったといえる。

（２）「必要」の概念

ではつぎに、「必要」の概念の検討にはいることにしよう。大熊氏の「人間生命の再生産」論にとって欠かすことのできない概念が「必要」の概念である。まずは「必要」と「欲望」が氏によっていかに区別して用いられているかについてみていく。

大熊氏によると、「必要」はそれがみたされなければ、生命の再生産を脅かすことにもなる最低限の物財であるが、「欲望」はそれがみたされなくとも生命の再生産に直接の影響を与えるものではない、いわば、余分な物財、贅沢な物財のことである。それどころか「欲望」の対象となる物のなかには、タバコのように客観的にみてその「欲望」が満たされないほうが人間にとって有益であることさえあるという³⁰⁾。

大熊氏の説明によると、この「必要」の概念は、E・エンゲルの人間の再生産における「生産費」につらなり、学説史的には経済学の古典派思想の価値法則につらなる。古典派は、価値法則にもとづいて「生産」を物的ならびに人間的なものとしてとらえてはいるが、そこでの人間的なものは労働力という抽象物におきかえられてしまっている。それゆえ、氏は、人間の再生産を労働力という抽象的なものではなく、家族にまで引き下げて具体的に扱うことが必要だという。

では、このように「必要」と区別された「欲望」は、いつから存在しているのであろうか。大熊氏の説明は、こうである。「欲望」の概念は約90年前に、「必要」の概念にとってかわって登場した。それは、経済学が物財の再生産一本の体系にかわったことと同時に生じた。「欲望」の強さは主観的なものであり、「必要」は客観的なものであるといえる。なぜなら、「必要」は、人間が生きるのに欠かすことのできない衣・食・住に直接かかわる生活資料の一定の質と量をさすからである。氏の言葉では、つぎのように説明されている。

「経済学は、とにもかくにも人間の再生産と物財の再生産という二つの系列を念頭においていたが、いまから約90年前になると、人間自身の再生産という基本事実を理論的認識の枠からはずしてしまい、物財の再生産一本の体系にかわった。注意すべきは、欲望の概念はそのとき必要の概念にとってかわって登場したものだということ。

注意すべきは、つまり必要の概念は、そのときに退場したということである。ここに欲望とは人間の欲望のこと。また必要とは人間の必要のこと。すなわち人間が生きるために欠くことのできない衣食住その他の生活資料の一定質・量のことである。欲望の強さは主観的なものであるのに対し、必要は客観的な概念であることに注意を請いたい³¹⁾。

氏は、「必要」概念に関して、現代の「生活の豊かさ」研究につながる意義のある指摘をしている。それは、「必要」の範囲の確定は容易でないけれども、生活者にとって一番の課題は、「生

活に絶対に必要なものはなんであるのか」を確定することであるという。

「わたしは『必要』の充足とって、『欲望』の充足とはいわない。欲望の充足は、財貨中心の今日の経済学における固定観念であり、この固定観念は人間中心の新しい立場からすれば、やがて粉碎されなければならない当のものである。われわれの生命の維持と充実のために欠くべからざる、衣食住その他いっさいの生活資料は、ある全体としての構造をもっている。それは多様な物財とサービスのいろいろの質および量から構成されている。どれが『必要』の限度であり、どこからが『必要』をこえた部分であるかは、実際には判定が容易でないことをみとめなければならない。判定の基準をなにおくかについても、いろいろ異説のあることをみとめなければならない。すべてそれらのあらゆる困難にもかかわらず、生活の本質を、『生』そのものの再生産としてとらえようとするのが、われわれの立場である。客観的な『必要』の概念が、いっさいの思考の起点である。まず、生活に絶対に必要なものはなんであるのか。その確定こそが、生活者にとって第一の課題でなければならない³²⁾。

この指摘は、筆者の主張する「消費ノルム」³³⁾の検討につながる提起である。ある社会のある時期の生産関係に規定されて、さらにはその労働の様式にも規定されて、その社会の平均的な生活のあり方は存在する。その生活のあり方とは、大熊氏の表現をもちいれば「人間生命の再生産」に「必要」とされる生活資料で構成された生活の基準のことである。その生活の基準は、時代とともに変化していくため、超歴史的に存在するものではないが、客観的にとらえることのできるものである。この客観的な生活の基準、筆者の用いる概念で表現すれば生活様式もしくは「消費ノルム」であるが、これは、資本主義の生産力の発展との関係で生活がいかに形成されているかを明らかにすることのできる生活分析に必要不可欠な概念である。

なお、大熊氏の考える「必要」の確定は、以下の引用にみられるように、必ずしも客観的に把握できるものとして、一貫して、考えられているわけではない。

「人間が、肉体的・精神的に生命にみちて生きていくことに、最低限に必要と思われる生活資料と生活条件。——その客観的・超歴史的な基準というものは存在するはずもないが、しかしわれわれ生活者は、個人および家族としての当面の基準については、それを探求することができるし、また確認することができるだろう。大切なはその『最低限』の意識であり、ときにはその実験と励行である、とわたしは思う。

およそ、『食事』というものには、食器その他の物的・装飾的条件があり、必要をこえた諸要素がある。また日常の『食物』の構造も、そのなかに栄養学的な必要をこえて、味覚的・視覚的要素を含み、奢侈的な部分さえ含む。必要概念は生活理論の骨子であり、生活者の基本観念であるとはいうものの、それは生活そのものの指導理念ともいべきものであって、たとえば家畜の飼育に必要な飼料の質・量のごとく、実証的に算定可能なものと信じられてはならない³⁴⁾。

氏の解釈によると、個人や家族にとっての当面の「必要」は探求し、確認することができるだろうが、実証的に算定可能なものではないものである。氏のいう「必要」とは、客観的な生活基準を示すというよりも、生活者としてどうあるべきか、どのような生活をめざすべきかといった理想像を表すものだといえよう。したがって、氏の提起する「必要」の確定が意味するものは、生活様式や「消費ノルム」の客観化と直接結びつくものではないのである。しかしながら、「日

本的な生活様式」が形成されつつある1960年代に「必要」を構成する要素が何であるかを探求しようとした問題提起は、「生活の豊かさ」研究にとって欠かすことのできない観点を含んでいたといえる。こうした観点を現実の生活実態にそくして、理論化していくことが、より具体的な生活分析には求められる。

さらに、大熊氏の「必要」をこえる欲求とされる「欲望」を否定することの問題点を指摘しておく必要がある。既述の引用の中で、氏は、「欲望の充足」はやがて粉碎されなければならないと述べておられる。だが、資本主義は、新しい欲望を生み出すとともに新しい欲望の消費者もみだしながら、蓄積を進めていくのであり、また、時代によって変化する「必要」の内容も「欲望」に含まれる財・サービスのなかから、新しくとりいれられていくものもある。したがって、つぎつぎと生み出される商品を欲望にしたがって消費するだけでよいのかといった判断を消費者が身につけるためにも「欲望」は創出されるべきであるし、また「欲望」の生み出されない資本主義は存在しないといえる。こうした現実の社会における「欲望」の作り出され方を考慮すると、氏の「欲望」に対する考えは、さらに深められる必要があるだろう。

最後に、「必要」と「欲望」を分けることによって氏が陥ってしまった資本主義に対する見方について指摘しておきたい。氏にとっての「欲望」の次元は、資本主義の生産体系であり、「必要」の次元はどの時代においても「人間生命の再生産」にとって不可欠な生産である。この両概念の区別により、氏は日本社会の生産第一主義を批判し、「人間中心」の社会の形成にむけての問題提起をしたのであるが、この区別は同時に、資本主義の生産とは関係のない存在としての「生活者」をうみだすことにつながった。というのは、氏の論理をたどると、資本主義の生産と「生活者」との関連は、次のようになっているからである。資本主義の経済は企業の営利追求のために存在するものであり、人間が営利主義にまみれてしまわないようにするためには資本主義の生産の側面から一歩離れて自覚的な生活を送れるように努力することが求められる。つまり、「生活者」は消費の領域にのみ関心を向け、かつその領域での「必要」を越えた消費に陥らないよう努力することが求められるのである。

だが、現実の私たちの生活は、資本主義の経済関係のなかで営まれているのであるから、その生活が生み出される資本主義的生産と資本主義的消費のあり方の双方に分析の眼をむけなければ、真の意味で「欲望」の体系である資本主義を批判したことにはならないだろう。大熊氏は、資本主義の営利主義を批判しようとした試みとは反対に、その営利主義にメスを入れることはなく、消費面での「生活者」の努力による対抗に限定されざるをえない新しい経済観の提起におわってしまっているのである。

（3）「消費者」から「生活者」へ

最後に、大熊氏による資本主義の「生活者」とは、いったいいかなる人間として定義されているのであろうか。それは、第一に、労働によって物を生産し、物の消費によって自己を再生産するという「自己生産者」とであると説明されている。

「——生活者とは自己生産者である。自己生産とは、労働によって物を生産し、物の消費によって自己を再生産することである。生命の持続・充実・発展のための努力が、人間においては自己生産の過程である」³⁵⁾。

氏の想定する「生活者」像の原型は、一組の男女、一つの家族であり、家族は、「人間生命の再生産」の単位であるという。氏の「生活者」像の原型である家族は、一つの理想型である。「生活者」の第二の定義は、人間にとっての「必要」が何であるか、人間の生活目的とその理想について、正しく知っている人のことをさしている。そして、「必要」を充足すると、そこから自由の選択の世界のはじまりとなり、その世界こそが人間的な生活の発端であることを知っているのが、理想の「生活者」であるという。

「わたしの生活者像の原型たる家族は、一つの理想型である。かれらは自分たちの生活がなんであるかを本質的に知悉しており、なにが生活に必要であるかを知悉している。と同時に、人間の生活目的とその理想がどんなものでなければならないかを、正しく知っている。すなわち人間が必要を充足したうえは、それをこえてなにかを自由に求めなければならないこと、その自由な選択の世界のはじまりこそ、人間における人間的な生活の発端であることを、知っているのである。必要の世界にも選択の余地がないわけではない。しかし、それが必要であるかぎりにおいて、選択そのものがきびしく制限されている。これに反して必要をこえた世界こそ、人間の自由の世界である³⁶⁾」。

氏の生活者論によると、わたしたちは日常生活では「生活者」である。「消費者」ではなく「生活者」という自覚をもつことが大切であり、商品中心にものごとを考える「消費者」が人間中心にものごとを考える「生活者」にとってかわる日こそ、経済の主人公の座に人間がつくことのできる日である。こうした「生活者」の概念と区別される「消費者」とは、商品の「消費者」のことであり、それは近代の経済学が発明した言葉であるという³⁷⁾。

大熊氏によると、思考の方法により、われわれは「消費者」であつたり、「生活者」であつたりする。物財中心の思考方法では、われわれは「消費者」であり、人間中心の思考方法ではわれわれは「生活者」である、という。現代の「生活者」は、「消費者」である。現代の「生活者」は、企業の提供する生活物資とサービスを消費するしかない環境におかれているため、「消費者」として行動をとらえざるをえないのである³⁸⁾。

では、いかにして現代に生きるわれわれは「生活者」になりうるのだろうか。大熊氏はいう。現代の人間問題は、どれだけ「生活者」としてふみとどまることができるか、であると。そのため、企業のマーケティング戦略を「生活者」がよく知ることが大事である。それは、マーケティング戦略の対象としての「消費者」になってしまうことから自己を守るという意味においてである。人間にとって「必要」の領域が充足された上で、自由の領域に関してはマーケティング戦略の対象になってもかまわない。だが、「生活者」としての自覚をもつことが現代人の価値体系となるならば、営利主義の行き過ぎ、資源の浪費等を抑止することにつながるだろう。こうして生産第一主義をのりこえることもできるのである。

以上が、大熊氏による「生活者」概念の定義である。

大熊氏の「生活者」概念の最大の特徴は、氏のいう「生活者」が理想型である点にある。氏によれば、ある人が「生活者」であるかどうかは、その人の心構えとそれにもとづく行動によって決まるということである。たしかに、自分の身の回りでおこっている事態に関心をもち、それについて考え、時には意見を発したり、行動をおこしたりすることは、人間がよりよい暮らしを求め、実現していくために必要なことである。だが、残念なことに大熊氏の「生活者」論の提起は、

自分たちの生活に対して関心を持ち、「生活者」として生きることを自覚しましょう、という人々に対する啓蒙に終わってしまっている。

また、大熊氏の「生活者」概念に含まれる内容は、1980年代以降の「消費社会」論で用いられた「賢い消費者」と一致する面がある。「賢い消費者」は、企業が提供する商品を購入するにあたって、その商品が自分にとって価値のあるものかどうかを十分に吟味してから購入する。「賢い消費者」は、ある商品の値段が安いから、あるいは流行だからといって衝動買いをしたりはしない。「生活者」と「賢い消費者」に共通するのは、資本主義のなかで自覚をもってうまく立ちふるまうことができ、生活をおくることのできる知恵のある人間なのである。

大熊氏の「生活者」は、働いては食べ、食べては働くという自己生産者としての自覚をもって、企業の営利主義にふりまわされないで生きようと自覚をする人々のことである。では、そうした「生活者」はいかに形成されるのであろうか。言い換えれば、「消費者」としての生活の甘んじている人々が「生活者」になるためには、いかなる条件が提供されるのであろうか。彼らが「生活者」としての自覚をするためには何が必要となるのであろうか。このことに関する大熊氏の提起はみあたらない。「生活者」としての自覚をもって暮らすことが「人間中心」の思想にもとづく生産第一主義の克服にとって必要であることが繰り返されているばかりである。非歴史的に、「自覚的に生きること」という共通項でくられた「生活者」には、「消費者」から脱却して「生活者」になる道筋についての条件は示されることはない。この点は、大熊氏の「生活者」論の弱点であると指摘できよう。客観的経済関係に規定された階級、もしくは階級のなかで多様に細分化された階層に属する人々の生活状態の分析こそが、生産第一主義の克服につながるのである。

- 19) 「人間の生命の再生産、すなわち生活そのものの持続と充実こそが、人間自身の永遠の主題であり、そして物財の生産過程は、その目的を達するために回避することのできない人間の課題にはかならない。

人間が物の生産のために存在するのでは断じてない。物の生産が、人間の生命の存続のために必要なのである。『人間中心』の思想とは、およそこのような観点に立つものの意味である。」「消費者から生活者へ」『生命再生産の理論 上』東洋経済新報社、1974年の194ページ。

- 20) 「欲望について」『生命再生産の理論 上』の214ページ。引用文中の傍点は大熊氏によるものである。以下の引用文でも同様である。
- 21) 「消費者から生活者へ」の195ページ。
- 22) 同前195ページ。
- 23) 同前の191～192ページ。
- 24) 「家の再発見」『生命再生産の理論 上』の163ページ。
- 25) 「人間の『創造』から生活の日常性まで」『生命再生産の理論 上』の20ページ。
- 26) 「家の再発見」『生命再生産の理論 上』の163ページ。
- 27) 「周知のように経済学では、このことばは個体としての人間についてのみならず、人間の日々の労働力の更新についても用いられる。すなわち栄養と休養をとって、一日の疲労から活力を回復することが、『労働力の再生産』である。ところが栄養と休養をとるということは、今日ではこれも原則的に人間が家庭においてなすのであるから、家庭は二重の意味で『再生産』の場だということになる。第一は個体としての人間そのものの再生産、第二は成熟した人間の生命力の日々の再生産である」『家族、社会、そして国家』『生命再生産の理論 上』の178ページ。
- 28) 「消費者から生活者へ」『生命再生産の理論 上』の194ページ。
- 29) 「人間の『創造』から生活の日常性まで」『生命再生産の理論』の19ページ。

- 30) 「そのような意味の欲望（市場になんらかの需要となってあらわれ、金銭で購入できるもの…引用者）には、それを満たさなければ人間の生命を脅かすもの、すなわち生の本能にねざすものもあり、逆にタバコの場合のように、それを満たさないでおくほうが、客観的に見て人間に有利だということもある。ある種の欲望は、それを抑制し、対象を断念し、欲望そのものの消滅に帰することが、客観的に見て明らかに人間に有利だということもある。」「欲望について」『生命再生産の理論 上』の218ページ。
- 31) 「欲望について」『生命再生産の理論 上』の205ページ。
- 32) 「消費者から生活者へ」『生命再生産の理論 上』の195～196ページ。
- 33) 筆者は、レギュレーション理論のアグリエッタが、「フォーディズム」とよばれる生産システムのもとの労働の様式とそこからもたらされた労働者の生活様式の変化との関係を分析するさいに用いた「消費ノルム」の概念を、批判的に検討したうえで自らの生活分析のキー概念として用いている。この詳細については、既出の拙稿『立命館経済学』第43巻第2号を参照されたい。
- 34) 「消費者から生活者へ」『生命再生産の理論 上』の202ページ。
- 35) 同前の193～194ページ。
- 36) 同前の196ページ。
- 37) 「“消費者”といえば、もちろん商品の消費者のこと。それは人間中心でなしに、商品中心にもの考える近代の経済学の発明である。子ども中心の家庭では、妻が夫を“おとうさん”と呼ぶ。そばで聞くと滑稽千万だが、罪はない。しかし、われわれ人間自身が、商品中心にもの考え、みずから“消費者”をもって任ずるというのは、人間精神のおそろしい倒錯である。“生活者”が“消費者”にとってかわる日。その日こそ人間が、経済というものの主人公の座につく日であろうと思う」。同前の191ページ。
- 38) 「現代の生活者は、生活に確固たる目標をもたなければならないが、しかし同時に、みずからの環境にめざめなければならない。現代の生活物資とサービスの大部分の供給者は、おしなべて営利企業であり、そして営利主義の論理をもってすれば、人間はすべて“狩場の獲物”にほかならない。それは文字通り『消費者』であり、『消費者』としてとらえることができる以外のなにものでもない」。同前の201ページ。

おわりに

本稿では、1960年代に、生産第一主義の日本社会のあり方に「人間中心」の思想の観点から「生活者」としていかに生きるかを提起した経済学者の大熊信行氏の議論をとりあげ、「生活者」概念が含む意味を明らかにし、さらには大熊氏が提起した新しい経済観の意味を問うことを通じて、筆者の「生活の豊かさ」研究にかかわる論点の整理をおこなった。

大熊氏は、近代経済学の理論枠組みでは現状の営利主義の資本主義を変えることはできず、ここでは人間は人間らしい生活をおくることはできないとして、「人間中心」の思想にもとづく新しい経済観を提起した。その思想の軸となるのは、「人間生命の再生産」論、「必要」の概念ならびに「生活者」論である。

「人間生命の再生産」論での大熊氏の見解は、こうである。「生産」という用語が近代の経済学では物財とサービスに関するものとしてのみ一面的に使われているが、「生産」のもともとの意味は生命活動にかかわるものであった。したがって、「生産」は物財的なものと生命的なもの双方を含む概念として理解されるべきである。物財の「生産」は、物的エネルギーを生み出す面

で「生産」をおこなうと同時に、人間の生理エネルギーを消耗する面で「消費」でもある。また家庭における人間による食料の摂取は、物的エネルギーを消耗するから「消費」であると同時に、それは人間生命、そして資本主義では同時の労働力を再生産するのだから「生産」でもある。「生産」と「消費」はこのように物財に関しても生命に関してもつねに平面的に同時に行なわれているのである。経済学の古典派では、生命的なものも含む意味で「生産」は考えられていたのであるから、その発想にもどらなければならない。このことにより、生産第一主義の日本社会のあり方とそこでの人間の生き方を問い直すことができるのである。

大熊氏の「人間中心」の発想は、高度経済成長のもとでの実質賃金の増大とそれともなう生活の変化ならびに長時間労働・過密労働の増加などの当時の社会的現実を背景に、より人間らしく生きるための思想とその方法として、従来の経済学では対応できない新しい理論枠組みとして提示されたという点に意義がある。だが、「人間生命の再生産」論で、「生産」に物的と生命的の両面を取り入れて、かつ両者を同一面にとらえるという提起をすることで、氏は、労働を通しての人間の成長を否定することになった。それは、氏がものごとをとらえるさいに超歴史的な把握のしかたをするという方法にもとづくものであることが明らかとなった。そのため、氏は、人間の発達にたいして労働がもつ普遍的な意味を見失い、また、資本主義的な経済規定をうけて存在している現実の労働を具体的にとらえることもできなくなってしまう。この点は、氏の方法の弱点である。

「必要」の概念に関する氏の見解は、こうである。「必要」とは、生命の維持・存続に不可欠の物財のことであり、「欲望」とは、生命の維持・存続にとっては余分な、あるいは贅沢な物財のことである。資本主義は、「欲望」の生産体系であり、生命の維持・存続にとっては不必要な物財まで生産し、消費させようとする。したがって、「必要」とはどこまでの範囲の確定を試みるのが大切である。

ある社会にとっての「必要」の概念を確定することは、階級を前提とした階層のおかれている生活の状態を分析するにあたって必要な作業である。したがって、「必要」の概念の提起とその確定の必要性について、氏が指摘したことには意味がある。だが、残念なことに、氏は「必要」概念と「欲望」概念を区分することで、同時に「生活者」を資本主義の生産からは切り離すこととなった。われわれ、生活をする個人は、社会関係と独立して生活しているわけではない。だれもが客観的な社会的・経済的諸関係のなかで生活している。営利主義の企業がうみだす商品を「欲望」の対象とみなし、それらから離れて生活することが大切であるという、氏が「生活者」に求める内容は、言い換えれば、資本主義の生産の側面には眼をむけずに、いかに消費にかかわるのみが問われるということを示している。氏によって提起された、生産第一主義を批判し、乗り越えるために提起された「必要」の概念も、結局は「生活者」の消費分野での努力にたよるしかないことを示すことになっている。

大熊氏による「生活者」の規定は、こうである。第一に、「生活者」は、働いては食べ、食べるは働くという循環のなかでの「自己生産者」である人間のことである。第二に、営利企業が提供する商品を購入するだけの「消費者」ではなく、自分の生きかたやどう生きるべきかといった生活目標を明確にもった人間のことである。

氏のいう「生活者」とは、生活にかんしての自覚を持った人間としての理想型である。自分の

生活や消費のしかたに関心を持ち、行動を律する立派な人間が増えることは、いきすぎた企業の営利活動に対する規制をときにはもたらすような力をもつことにもなるだろう。だが、氏のこの立派な提起には、いかにして「生活者」が形成されるのか、そのための条件はなにであり、いかにして与えられるのかについてはいっさい何の助言もないのである。

以上が、大熊氏の「人間中心」の思想にもとづく新しい経済観の提起の意味と問題点、ならびに「生活者」概念の意味である。

なお、大熊氏は、「人間生命の再生産」で生産と消費とは一連のつらなりのなかにあると解釈するさいに、マルクスの『経済学批判 序説』を素材としている。氏は、『経済学批判 序説』の「生産と消費」の一部を用いて、その同一性の側面のみをとらえる。マルクスが『序説』で述べている「生産と消費」の解釈と大熊氏の解釈とが同じものであるのか、またなぜ大熊氏がマルクスの『序説』での「生産と消費」との説明の一部のみを用いてみずからの理論にとりいれているのか、といった点に関する検討は今後の課題としたい。